
Sanvitalia

夕氷嘩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S a n v i t a l i a

【コード】

N 8 8 4 4 D

【作者名】

夕氷嘩

【あらすじ】

過去の傷から、メイクを手放せなくなってしまうた篠山遥香。シノヤマハルカそんな彼女が初めての職場で出会ったのは…？

1 (前書き)

春企画「はじめてのxxx。」参加作品です。

服を着替え終えて篠山^{シノヤマ} 遥香^{ハルカ}は小さく息をつくど、沈みがちな気分
で鏡の前に立った。

鏡台にはずらりとメイクの道具が並んでいる。

マスカラからアイシャドウ、リップなど質の良いものから今、流行^{はやり}
の最新コスメまで…その品揃えの良さには、遥香自身呆れてしまっ
た。

プロのメイクアーティストにも引けを取らない…この量なら店舗だ
ってもてそうだ。

よくこんなに集まったものよね…

思わず苦笑を漏らしてしまう。

その中からいくつか候補を選び出すと、目の前に順番に並べた。

しばらく逡巡してから使わなそうなものだけ脇に寄せると、遥香は
顔を上げて鏡に映る自分の顔をじっと見つめた。

相変わらず、地味な顔。

一重の目に高くも低くもない鼻、薄い唇…どれもこれも印象が薄く、
目立たない。

よく、そのひとの顔の特徴を言おうとして何も思い浮かんでこない
…なんてことがあるけれど。 遥香の顔はまさにその典型的な例だ
った。

いまさら足掻いたところで整形でもしない限りこの顔立ちが変わる

ことはない、とうの昔に諦めてはいたけど…それでも鏡で自分の姿を見るたびに古傷が疼いてしまう。

遥香はため息をつく、今日のメイクはどの様にするか悩み始めた。今日は初めての職場へ行く日だった。先月まで働いていた職場は、遥香は上司からのセクハラに耐えられず結局2年足らずで辞めてしまった。自分なりに真面目に働いてはいたけれど、もともと会社の雰囲気合わなかったのもあったし、辞めたことに悔いはなかった。遥香にとって唯一の親友といえる麻野アサノ 曜子ヨウコにだけ事情を話すと、

「なによ、その上司！なんですつとあたしに相談もせず黙ってたわけ！？」

…と憤慨してしまい、延々と説教されるはめになってしまったのだが。

だがそんな境遇に追い込まれた遥香を心配した曜子は、自分が働いている会社で働いてみないかと遥香を誘った。曜子の会社ならば今まで遥香が働いていたところと職種が似ているし、何より曜子が働いているところは曜子の父親が副社長を務めている会社でもあったからだ。

就職難と言われるこの世の中で、再就職できる確率は更に低い。

ちょうど求人情報誌で次の職場を探していた遥香は、始めは職場まで紹介して貰うなんてさすがに悪いと思い曜子の誘いを遠回しに断っていたのだが、結局押し切られるまま面接を受け、いつのまにか4月に再就職することが決まってしまうていた。

ラッキーといえばラッキーなのかもしれないけれど…それでもやっ

ぱり申し訳なさが勝ってしまう。曜子の好意を無駄にしないためにも…ちゃんと仕事を頑張らなくちゃ。

遥香は心の中で固く決心して、メイク道具を手を取った。

出社まであと1時間ちょっと。

アイラインを目尻まで引き、その上に濃い色のクリームシャドウのせ、睫毛にはしっかりとマスカラを塗って一重をカバー。薄めの唇にはグロスでふっくらした唇に見えるようにして…

ゆらゆらと揺れる不安を閉じ込めるように、何度も念入りに化粧を重ねていく。

30分後に鏡に現れたのは、普段の遥香とはまったくの別人だった。どこから見てもそこにいるのは気の強そうな女性。

ホントにまるつきり別人よね…

遥香はそんな自分の顔を見て、自嘲的に小さく笑った。

高校生の時からずっと続けてきたのだ。

今更どうってことない…

自分に言い聞かせるようにして、ゆっくりと目を閉じる。

遥香は下降していく気分を振り切るように冷め切ったコーヒーを一気に飲み干すと、カバンを手にとって新しい職場へと出向いた。

1 (後書き)

はじめまして

一応この作品はオフィスラブストーリーの予定なのですが、実は自分はまだ学生だったりするので「会社」についての知識はまったくないに等しかったりします(汗)なので、ちょこちょことおかしな部分が出てくるとは思いますが、完全にフィクションとして少しでも楽しんでいただけたら幸いです(^ ^ ;)ではでは〜!

「えー…今日からここで一緒に働くことになった篠山さんだ。」

「篠山遥香です。よろしくお願いします」

部長の言葉に促されるようにして、遥香はやや緊張した面持ちでペこりとお辞儀をした。

顔を上げちよつど曜子とばっちり目が合うと、曜子は茶目つ気たっぷりに片目を瞑ってみせる。

そんな曜子に苦笑しながら、さりげなく周りの様子を伺い、遥香は心の中でため息をついた。

やっぱりね…

最初の印象が肝心…っていうのはよく聞くけど。

案の定、社員達はひそひそと口元を手で覆ってなにかを囁きあっている。

自分にとってあまりいい話でないことは明らかだった。

駄目よ、弱気になっちゃ…

ちゃんと頑張るって決めたじゃない。

怖気づきそうになっている自分を遥香は心の内で叱咤すると、平然とした顔を何とか装って前を向いた。

部長はぐるりと室内を見回したあと、一人のひとに声をかけた。

「芹澤君。彼女に仕事の説明するの、任せていいか？」

「分かりました」

低くて、どこか惹きつけられそうになる声。

遥香はドキリとして声の主を目をやると、姿を現したのは随分と背の高い男だった。

た、高っ……

遥香は啞然として、目の前の男を見つめた。

遥香の身長はけっして高いといえるものではないけれど、そこそこあるはず。

なのにその遥香が顔をかなり上げなければならぬほど、その男は背が高い。優に180センチを超えているのではないだろうか？

「初めまして。課長の芹澤です」

その言葉に遥香はハッと我に返ると、慌てて頭を下げた。

「篠山です。よろしくお願いします」

「篠山さん、ね。じゃあ、早速だけど仕事の説明に入ってもいいかな？」

「は、はい」

優しそうな人…

遥香は上司に恵まれたことに内心ホッとしつつ、説明に耳を傾けた。

「そういえばアンタ…相変わらずね、そのメイク」
「…目立つ？」

笑ってごまかしてみようと試みるが、逆に裏目に出ってしまったようだ。

遥香の言葉を聞いた途端、曜子の顔が豹変した。

「目立つも何も！それじゃ、悪目立ちだって遥香も分かってんでしょ？」

まくし立てるように曜子に怒鳴られて、遥香は肩を竦めた。

昼休み。

遥香は曜子に連れられて、会社の近くにある蕎麦屋にやって来ていた。

昼時であることも手伝ってか、店内は遥香たちと同じような社員で溢れ返っている。

曜子の怒鳴り声に周りの客が驚いて振り返るのに気付き、曜子は慌てて声のトーンを落とした。

「…もう少しメイク薄めにしても良かったんじゃないの？あんまり派手にしすぎても逆に浮くだけよ？」

遥香は曜子の言葉に何も言い返せず、黙り込んだ。

分かってはいるのだ。

自分が他人にどのように思われているのか…それは社員の反応でも一目瞭然だった。

それでも、遥香はやめることが出来なかった。遥香の臆病な心がそれを妨げる為に。

曜子はふーっと長いため息をついてから言った。

「…アンタがそれでいいなら、無理にやめるなんて言わないけど…。でも、そろそろ変わってみてもいい頃じゃない？外見と中身が一致しなさすぎよ。まあ、せいぜい女子社員に絡まれないように気をつけることね」

「…」

まさかすでに、前の会社で絡まれていたなど言えるはずもなく。遥香は何も言わずにただ苦笑いを零した。

「ま、そんなことよりも。どう？芹澤さんは」

「…芹澤さん？」

突然話が切り替わったことに驚きつつ、遥香は眉を寄せた。

…って、さっきのあの課長のひとのことよね？

「優しいひとだと思っけど…」

「バカ！そんな事言ってんじゃないわよ。あれだけ女子の羨望の眼差しを受けておきながら気付いてないわけ？」

呆れたような曜子の声に、遥香は首を傾げた。

いまいち曜子が何を言おうとしているのか、掴みきれない。

気付いてないって…何が？

「はあーっ。あのね、芹澤さんは営業部のアイドルなの！崇拜の対象よ。この意味分かるでしょ？」

「アイドル…」

…確かに。

言われてみればそうなのかもしれない。

割合整った顔立ちをしているし、課長というポストにまで就任しているのだ。更にあの紳士的な優しい性格まで加われば猶の事。女子社員たちが放っておくはずがないのは当たり前か。

妙に納得がいき、遥香はひとり頷いた。

「いいわよねえ、遥香は。あの芹澤さんが、仕事とはいえ、午前中ずっと遥香に付きっ切りだったじゃない。あの優しい微笑を拝めるもんなら、彼のために何でもするって子がいくらでもいるはずよ？」

「…そうかしら」

「そうに決まってるでしょ！あーあ。お父さんに頼んで、芹澤さんとの見合いでもセッティングしてもらおうかなー」

「はは…」

そういえば、曜子って副社長の子だったわね…

曜子の冗談とも本気ともとれる言葉に、遥香はひきつった笑いを浮かべることしか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844d/>

Sanvitalia

2010年10月9日03時05分発行